“小さな群れよ、恐れるな。あなたの父はよろこんで神の国をくださる”（ルカ１２－２３）

小さな群れ

カトリック美唄教会
２０２４年　３月　№322
２０２４年２月２５日発行

Fr.Narciso Cavazzola ofm

冬気もよやく和み、春の自然が一気に活動を始める中、3 月は四旬節と復活祭の準備の期間です。

復活の喜びのメッセージは、女性によってもたらされました。その足取りは、はやる心をおさえきれず、小走りになっていました。

弟子たちが復活の主と出会った記事が読まれていきます。私たち一人ひとりは、この偉大な出来事を宣べ伝えるために派遣されています。

初代教会から日曜日は「主の日」と呼ばれ、大切にされてきました。

日曜日は、1 年中「主の日」と呼ばれ、毎週主の復活を記念しますが、復活の主日はこの主日の頂点、祝日中の祝日です。キリストの復活こそ、私たちの信仰の源であり、この出来事は福音書によると、週のはじめの日、つまり日曜日におこったとされています。

復活を伝えるとき、伝統的な思想があります。復活は生きておられる神の力のあらわれです。「神は生きている者たちの神なのです」。

キリストが復活しなかったのなら、
わたしたちの宣教は無駄であるし、
あなたがたの信仰も無駄です。（コリント 1 15.14）

復活は終末的出来事であり、それがイエスの復活で、あのイエスの中に実現されました。イエスの復活の主役は、イエスを復活させた神とイエスご自身。

人間の側からは、ペトロ、ヨハネを中心にする弟子たちと、マグダラのマリアをはじめとする女性たちです。

復活を伝える伝承にはいくつかありますが、主の復活のメッセージを弟子の視点で見るときに、私たちと主との出会いはいっそう深められることでしょう。イエスの十字架と復活の出来事が、私にとって意味あることになるでしょう。

2024年3月　主日ミサ・平日のミサ予定

美唄教会　小さな群れ
2024年　3月　№322
2024年　2月25日発行

主任司祭　ナルチゾ神父

主日のミサ前１０時３０分より十字架の道行をします

日	曜	ミサ		各種勉強会	会議・その他事項
		主日・祭日	時　間		
1	金		午前10：30	ミサ後聖書に親しむ	
3	日	四旬節第3主日	午前11：00		
8	金		午前10：30	ミサ後聖書に親しむ	
10	日	四旬節第4主日	午前11：00		運営委員会
15	金		午前10：30	ミサ後聖書に親しむ	
17	日	四旬節第5主日	午前11：00		
22	金		午前10：30	ミサ後聖書に親しむ	
24	日	受難の主日 (枝の主日)	午前11：00		
28	木	聖木曜日 (主の晩さん)	美唄教会では ミサ　なし	砂川教会 午後7時	
29	金	聖金曜日 (主の受難)	美唄教会では ミサ　なし	砂川教会 午後7時 (大斎・小斎)	美唄教会午後3時から十字架の道行をします
30	土	聖土曜日 （復活徹夜祭）	美唄教会では ミサ　なし	砂川教会 午後7時	
31	日	復活の主日祭	午前11：00		

《　平日のミサ　》　**金曜日のみ　午前10：30**　1.8.15.22日です
《 聖書を親しむ 》　平日のミサ後、旧約聖書に親しんでみませんか。

霊名の祝日（敬省略）	清掃当番	花当番
10日　マリアフランシスカ　村　田　千津子 19日　ヨゼフ　吉　村　道　雄	第2週　小川（知）・三間 第4週　船野	東

【お知らせ】

◎１/28(日)世界こども助け合いの日　献金￥9,900を送金しました。

四旬節についてのひと言

金曜日のミサ後に聖書に親しむ会で四旬節について学びました。主日の説教などで、神父様から沢山聞いてきています。この日の資料から抜粋したものですが、分かち合いたいと思い、書きました。

（記：大城）

［四旬節の起源］

「40」という数字は、旧約聖書の中で特別な準備期間を示す数字であった。例えば、モーセは民を率いて 40 年荒野を彷徨っている（民数記 14-33　創世記 7.1-17　ノアの箱舟の 40 日間）。ヨナはニネヴェの人々に 40 日以内に改心しなければ、街は滅びると預言した（ヨナ記 3.4-6）。イエスは、公生活を前に 40 日間荒野で過ごし、断食した（マタイ 4.1～11）。

四旬節の 40 日間は、そのような伝統に従い、キリスト教徒にとってはイエスに倣うという意義のある準備期間となっている。元は初代教会で復活祭を前に行っていた「40 時間」の断食のことであった。復活徹夜祭には、成人の洗礼を行うのが初代教会以来の慣習であり、受洗者たちも初聖体に備えて 40 時間断食を行っていた。

四旬節は本来、復活祭に洗礼を受ける求道者の為に設けられた期間であった。

４世紀に入って、ミラノ勅令によりキリスト教が公認されると、受洗者の数が激増して一人ひとりに対しての十分な準備が行き届かないようになった為、従来は求道者のみに課していた復活祭前の節制の期間を、全教徒に対して求めるようになった。これが四旬節の起源である。

［四旬節の慣習］

四旬節では、伝統的に食事の節制と祝宴の自粛が行われ、償いの業が奨励されてきた。四旬節の節制は伝統的に、祈り、断食、慈善の３点を通じた悔い改めの表明と解される。現在も、神に対しての祈り、自分自身に対しての節制、更に他人に対する慈善の３つが四旬節の精神として教えられており、娯楽の自粛や慈善活動への積極的な参加を行う信徒もある。

［節制の意義］

四旬節の中には、厳格な断食をなすという習慣は、古代末期から中世にかけて確立する。肉はもちろん卵、乳製品の摂取が禁じられており、一日一度しか十分な食事を摂ることができないとされた
（ナルチゾ神父様は修道院では週日パンと水だけだったと云われてました。）

キリスト教では、イエス・キリストの受難と死は、人間の罪を贖う為であると考えてきた。古代以来、キリスト教徒たちは、その苦しみに少しでもあずかろうとしてきたのである。

中世に入ると、そのような意義が忘れられ、徐々にしぶしぶ行う義務的な節制という意識が強まってきた。近代以降の西方教会では、節制を「義務」ではなく「自ら選び取る」ものであるということを強調するようになった。

食事の節制を、形式的なものと考え、肉などの主要な食べ物でなく、自分が好きな食べ物を節制する、或いは自分が好きな娯楽を自粛する、節制の代わりに慈善活動を行う、などといったことも行われるようになった。現代でもキリスト教徒にとって、四旬節中の節制にはキリストの苦しみも分かち合うという意味がある。しかし今日では、アメリカナイズや物質文明などの社会の変化により、かつてのような厳格な実施は求められていない。現代のカトリック教会における四旬節中の節制は、対象は 18 歳から 60 歳までの健康な信徒である。

大斎の実施については、各国の司教団の決定に従うよう書かれている。基本的には大斎の日には一日一度十分な食事を摂り、あとの二回は僅かに抑える。大斎の日には、肉は摂らないという小斎も同時に行われる。現行のカトリック教会法では、毎週金曜日と灰の水曜日や聖金曜日に、小斎を行うというのが基本的な形式である。